

錢五金部壹

號八拾第卷參第

日五月二十年七十三治明

目次概要

鹿子木孟郎君に答ふ	三宅克巳	一、二
小言大語	望雲	二
白馬會壇評(下)	めなしどり	三
茶の花を詠う	工學士 中澤 臨川	三
泰西美術家略傳		三
二葉會作品橋本雅邦翁講評		三
神話		四
木曜會寫生會	うしほ	五
聖博善查の結果	大下 藤次郎	五
時報其他		六、七
『女に金ねだれる將校』	テルボル筆	一
『微笑せる騎士』	ハルス筆	二
『ベツシントン伯夫人』	ローレンス筆	四
『荒宴』	石井 滿吉筆	五
『木彫布袋置物』	米原 雲海筆	六
『悲』	グールツ筆	七
鑄銅尙武置物	合 作	七

鹿子木孟郎君に答ふ

三宅克巳

天冴へ亘り秋光朗に、晩秋の好景今や逸すべからず、此の際に當り我等風景畫家の繁忙亦思ふべき也。今回鹿子木君は君が繁忙の餘暇を割て懇々説諭至らざる無し、余は今丹青の事に忙しく到底其回答を敢て爲すの暇なご雖も問はれて答へざるは禮にあらざるが故に茲に聊か愚見を陳述して以て其回答に替へん歟。

抑も君が歸朝以後吾が沈靜なる洋畫界は、君獨得の畫論により大分に賑敷、稍春色を催し來れるは是れ君に對して深く謝せざる可らざるものなり。(雖然其製作界に於ては未だ)

抑も君が言論の滔々として水の流るゝが如く其文筆の恰も駿馬の奔る如くなるは正に畫界一流の論客(未だ作家と云はず)たるに相異無きを認む。然雖吾人の以て甚だ遺憾とするは君が言論の餘りに高遠深遠に失し其論旨の奈邊に存するや、其文意の何たるや、之を解するに苦むこと即これ也。蓋し此感獨り余輩のみに止まらざるを信ず。故に余は今其回答を爲すに當つて君が全文を解するの識乏きが爲め或は其の論旨を誤解し、爲に見當違ひの答解を敢て爲すの疑無しとせず、是れ余が豫め明白せざるべからざる所のものなり。

最も解し難き君が全文を通讀して君が論せんと欲する處のものを想像するに、先づ『日本畫家が日本畫の手法のみに依頼せず更に洋畫を修めんと欲するは大に面白き現象なれど然も是を洋畫の基礎たる油繪に求めずして水彩畫に求めたるの大に變て

こなるを一言せしものなり」と、前回文意の缺を補はれて稍君が意を明にするを得たれど何が故に變てこなるや未だ更に不明なるものあるに非ずや。次に日本畫の不完全なる點を掲げ且つ又洋畫の所謂水彩畫なるものゝ不完全なる日本畫に相去るの遠からざるを説き、更に此の不完全なる水彩畫を選びて敢て研究せんと欲する日本畫家の鑑識未だ低劣なるを反覆非難せられしものゝ如し。余輩は今此の一節に就て見るも氏が日本畫家に希望するの餘りに酷なるに驚かざるを得ず、兒童が數丈の階段に登らんとするや、誰れか直に其最高頂

來る、假令風景畫を描くに於ても若し此の路より入らざれば、そは基礎無き風景畫にして見るに足らず、コロオ、ミレー等の風景諸家の如何に人體寫生に研鑽を積めるかを見ても首肯せざるを得ざらん。三宅氏の如き徒に基礎なき水彩風景畫を作るを止め、少しく此點に學ぶ所あれ。と余輩淺學無識なりと雖も君が此の説明を得て初めて其然る所以を知るものならんや。君或は巴里に到つて初めて此の一大眞理發見の功を奏したるものあるべしと云へども斯る事柄は拾年、前黒田久米兩氏歸朝の當時既に已に盛に唱導されし處のものに



筆ヒル・ボルテ

『校將るれだね金に女き若』

に足を止めざるごとく叱責するものあらんや。更に氏は日本畫が洋畫の根底なる人體寫生、解剖學、遠近法、陰影法を解せんと欲するもの無きを嘆じ且つ又日本畫家の見識たるや唯單に新奇を得んと欲して之を求むるより外なく、從來の日本繪に存する缺點すらも明白に答へ得る人少からんと、單純粗雑恰も小供らしき論法を喋々するに至りては聊か以て驚かざるを得ず。

更に君は語を繰返して曰く洋畫の根底は之を人體の寫生にありとなし、古來の大家皆此の徑路を踏

て余輩末流の者に至るまで萬々心得居る處ならずや、然り而して爾來春秋を送迎すること茲に十數回、明治三十七年の秋に及びて再び事新らじげに喋々して君の口より此教訓を承らんとは吾人も亦遂に思ひ及ばざりし所なりとす。

次に水彩畫の到底道具立ての(余は少しく此の意味を解するに苦む)上に於て油繪に及ばざる事例を挙げられし事至極懇篤到らざる無し。且つ其説に曰く『水彩畫を専門とせんとする畫家は恰も日本畫具を以て西歐の畫を模寫し若くは西歐の畫

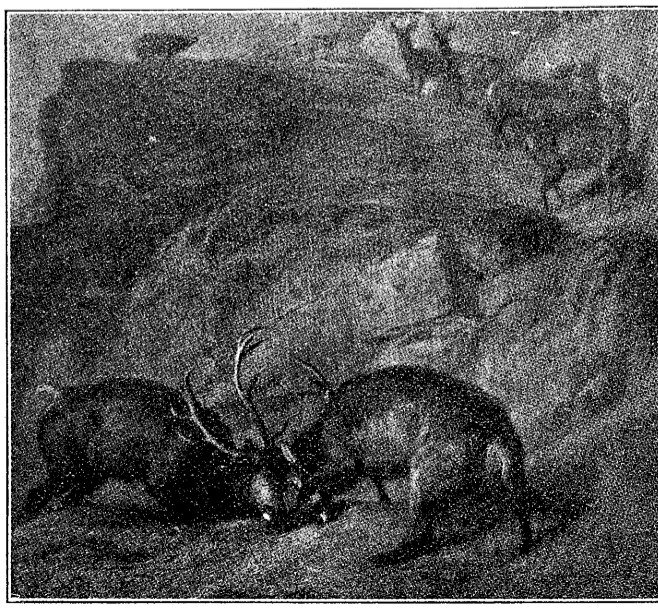
家が成せる如き色彩を顯はさんとして無駄骨折ると其愚遠からず。由來美は一體なり。自個が顯はさんとする形體と色彩の美は之を顯はすに最も便利なる繪具を用ゆるを至當とす。若し油繪の名畫を見て其形體色彩の美を顯はしたるの妙なるに感せば、自己も亦油繪を用ゆべし。之を他の畫具を用ひて顯はさんとする無理の注文なり、よし之を能くし得たりとするも美を顯はしたる美術品として輕重なきにあらざるや、例へば若し單に米國に航するを目的とする兩人あり、甲は汽船を用ひ、乙は乗るべき汽船あるに拘はらず、一帆船を用ひんとす。甲何ぞ乙の愚を笑はざるを得んや。彼の下村觀山氏の如き之に類するにあらざるや。三宅氏も亦水彩畫を以て油繪に對せん。亦此類か。と余輩は今斯る珍妙なる質問に對して其答辯に少しく惑はざるべからず、君よ余はレムブランの肖像畫、ムリロの宗教畫、ルーソフの歴史畫、斯る譽

大作家を取て企つ能はざるの故を以て真地目に研究する價值なきものとなすか、水彩畫は油繪に比して其顏料の不完全なる故を以て到底語るに足らざるものとなすか、若し夫なりとせば余輩又君に對して云ふの要無し。且つ氏は更に語を切にして曰く、『知らず三宅氏は歐洲幾百年の歴史を無視し彼の歴代の大家連が見たる見識を破却して其一心を投じて畫かんとする畫に水彩畫具を用ひんと欲するか。將た自ら大成する能はざるを認めて、一等下りたる水彩畫專門家となりて、一生を送らんと欲せらるるか、余は此の如き畫家が日本に輩出するを願はず、氏以て如何となす。』と余は右の文旨の餘りに單純に之餘りに小供らしく其後氣無に對し聊か真地目たる能はざるなり。君よ、余は未だ歐洲幾百年の歴史を無視する程のタイシタ豪物に非ず(其の以下の文意不明遺憾至極。余は又大成せんが爲に抑も繪畫に従事せず、一等、二等、三等、君説くを止めよ。余輩の眼中世の所謂成功の希望ある無く、一流二流の差別ある無し。余は唯自己が感得する自然の美を自己相應の力量に於て描寫することを得ば余が終生の望はこれにて足れり。大成小成余に於て何等の關係無し。余は寧ろ徒に空漠たる大望を抱き獨り免許の大家先生を目して却て奇怪に感ぜざるを得ず。人體寫生の蘊奥を極め、解剖學の奧義に達し、遠近、陰影の法を諳じたる天晴の大家先生にして然るも往々其作品の醜劣到底觀るに足らざるものあり。斯の如き畫家こそ眞に日本に輩出するを願はざるなり。余は再三述ぶるが如く君の論旨如何にも動搖、恰も孤島の波上に漂ふが如く、終始一貫透徹するものある無く、往々自家撞着の觀無き能はざるは、甚だ遺憾となす處のものなり。人體寫生を基礎としたる油繪の外他に顧みるもの無きを主張するが如くにして『余は日本の諸家が悉く油畫家となるを希はず、寧ろ從來の日本繪畫の一新面を開かるる人々あるを希望して止まざる者なり』と言ひ、水彩畫は殆んど語るに足らざるものとして葬むるが如く、『素人として清暇を水彩畫に費さるる人の益々多からんことを希ふ。これやがて深遠なる洋畫なるもの趣味を解するの階梯たるべけれどばなり』と結論する、君よ、君が不完全にして顧みるに價值無しと論定せし水彩畫は果して深遠なる洋畫の趣味を解する階梯たる程の難有きものなるや。

君が論旨千轉萬化恰も猫眼も雷ならざるに到つては、唯々呆れざるを得ず、余輩今少しく述べんと欲する處のもの無きに非ずと雖も、本氣になりて今更相手取るの甚だ大人氣無きを悟りたれば、唯大方讀者諸君の聰明なる判断に一任し、余は又再び嘴を出すを欲せず。水彩畫に對する吾人の立場は大に明にせんと欲するものありと雖も、斯る場合に於て是を喋々するの益無きを知れば、又他日筆を改めて靜に述ぶる所あらん。余は今茲に無益の冗説を綴りたるを愧ぢ併て神聖なる本誌の紙面を汚したるを謝す。角筈村の秋色未だ全く去らざるべし、いでや晩秋の作を描かん爲に、茲に此禿筆を捨て、彼の彩筆を執らん哉。(完)

小言大語

米國のヴァン、ダイクはいへり。『吾人が美術の展覽會よりして齎らし歸るものは、畫家の觀念、想像又は意匠よりして得たる印象なり、吾人が感興は畫家特殊の性情より惹起せらるるものなり』と、而してその所以を論するに曰く、『吾人が今美術展覽會に臨み、専ら技術の如何を論ずるものこそせんか或は明暗、或は傳彩、或は布圖、或は配合、或は一部の線條、或は一端の遠近等に着眼す可し。勿論是等技術上の形貌につき形貌其者を美として之を嘆美する素より可なり。されど既に展覽會を去りて後吾人が家に齎らし歸る處のものも果して何者なる可きや、畢竟是れ唯だ一の印象たるに過ぎざる可し。然らば則ち其印象は手の巧みに描かれたるによるか、精緻を致せる衣服の描法によるか、灼爛たる傳彩の美によるか、樹々の風に搖ぐが如くなるによるか、描寫の眞に迫るによるか、あらず吾人は却つて是等の外形を忘る可きなり。外形其者は未だ以て深く感興を動すに足らず、苟くも大展覽會 作として推賞に價あるものならんか必らに就て ずや、其外形よりも更らに強き一大要素なる可らず、蓋し其要素たる畫家の觀念、思想若くは感情に外ならざる可きなり』と、吾人謂へらく、その言の裡に誠に眞理を含めるものあり、所謂通り一べんの見物人、若くは同じ形容詞附の鑑賞家、批評家にありては、色彩の美、配圖の妙描法の巧、はた迫眞等の如何を稱して、その他に及ばず、是等の者の兎角の評判、兎角の批評あるも、蓋し何等傾聴の價あらざる可きなり。然も多數に制せられんとはいつ、將た多數を制せんとは存在の跡を絶たざる如し。斯くては眞正なる可く將た神聖なるべき藝術の批判は遂に之を求めて得可らざる可し。吾人此ヴァン・ダイクの言に顧み、謂ふ所の深き印象、即ち作家の觀念、思想若くは其感情の人を動かす底の作の出でんに誘ふことは遂に之を批評家(批評家といはず)の側に見出す能はざるが故に、作家の努めて之を出すに力め、眞正なる批判家の出づるに迎ふるの途をとるの要ある可きを思ふ。(望雲)



もじり畫(一) 此畫は如何なるもじり畫となりしか次號に示すべし